



Title	大学キャンパス計画における防犯環境設計の適用における課題考察：北海道大学における利用者意識と犯罪被害実態との比較分析
Author(s)	中村, 歩; 森, 傑
Citation	学術講演梗概集, 2012, 155-156
Issue Date	2012-09-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54903
Rights	日本建築学会. 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである.
Type	journal article
File Information	AIJ2012.5057.155-156.pdf



大学キャンパス計画における防犯環境設計の適用における課題考察 - 北海道大学における利用者意識と犯罪被害実態との比較分析 -

正会員
同○中村 歩*
森 傑**

キャンパス計画
防犯

CPTED
犯罪

地域安全マップ
ワークショップ

1. 背景と目的

近年、大学キャンパスは教育研究のための敷地という意味だけではなく、地域の生活環境の充実に資するパブリックスペースとしての役割が期待されている。開かれたパブリックスペースとして大学キャンパスをとらえるとき、これまで以上に、その環境の安全性が求められる。

そこで、本研究は、全国の大学の大学キャンパス計画における防犯体制構築の現状を調査し、防犯環境設計（以下 CPTED）の観点から課題を分析する。また、北海道大学における利用者の意識・評価についてケーススタディを行い、犯罪被害実態との差異を比較分析することで、大学キャンパスの環境デザインへの CPTED の理論適用における課題を考察することを目的とする。

2. 大学キャンパスにおける防犯体制構築の現状

2-1. 調査方法

全国 744（分校等を除く）の国・公・私立大学に対し、アンケートを用いて大学キャンパス計画における防犯体制の構築状況を調査し、252 大学から回答を得た。

2-2. 調査結果

大学の設立主体別にキャンパス計画の策定状況を確認すると、キャンパスマスタープラン（以下 CMP）の策定率は公立大学で 1 割、私立大学で 2 割程度であるのに対し、国立大学では 9 割と突出していることがわかる（図 1）。これは国立大学が自らの研究成果とキャンパスを広く地域に開放し、地域資産として一体的に整備・管理しようとする意図の顕われであると解釈できる。一方で、CMP の見直しについては適宜または未定と回答する大学も多く、

社会情勢及び周辺環境の変化に順応したキャンパスであり続けるための計画策定体制と適切な計画の評価と見直しが求められる。

さらに、CMP 計画者がキャンパス計画においてどのような計画要素を重要視しているかについては、教育・研究施設の充実やインフラの更新等のキャンパス環境を形成する要素が各設立主体で共通して重要視されていたが、防犯・防災対策については重要であると認識されにくいことが分かった（図 2）。また、計画者の CPTED についての認知と計画への導入についても、認知している計画者は全体の約 2 割であったが、実際に CPTED の概念や設計手法を導入している大学はそのうちの 6 割を占め、CPTED の計画手法が他のキャンパス計画の計画要素と共存し得ることが示された。

3. 北海道大学を対象としたケーススタディ

3-1. 調査対象

北海道大学は札幌市の中心部に立地し、観光地として地域に開かれた、広大なキャンパスを抱えており、多種多様な利用者像及び利用形態がみられる。そのため、公共性の高いキャンパスをもち、安全性確保の必要性が高いといえることから、本研究では北海道大学の札幌キャンパスを調査対象とした。

3-2. 札幌キャンパスにおける犯罪実態

3-2-1. 調査概要

札幌キャンパスの犯罪発生実態を捉えるために、学内での犯罪被害について調査した。2009 年 1 月から 2011 年 10 月までに犯罪被害として認知された刑法犯をキャンパ

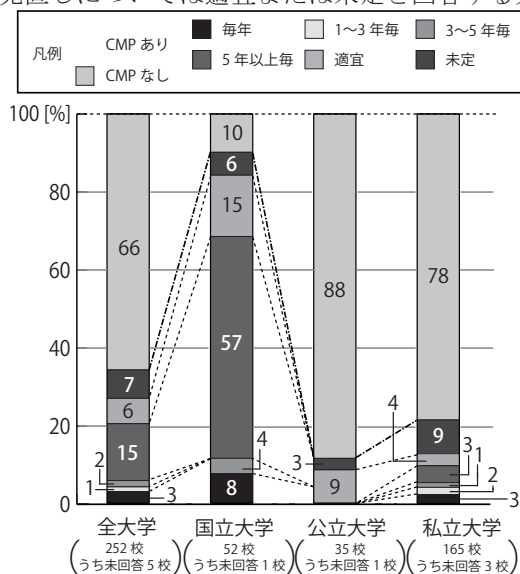


図 1. CMP 策定状況と計画の見直しを行う頻度

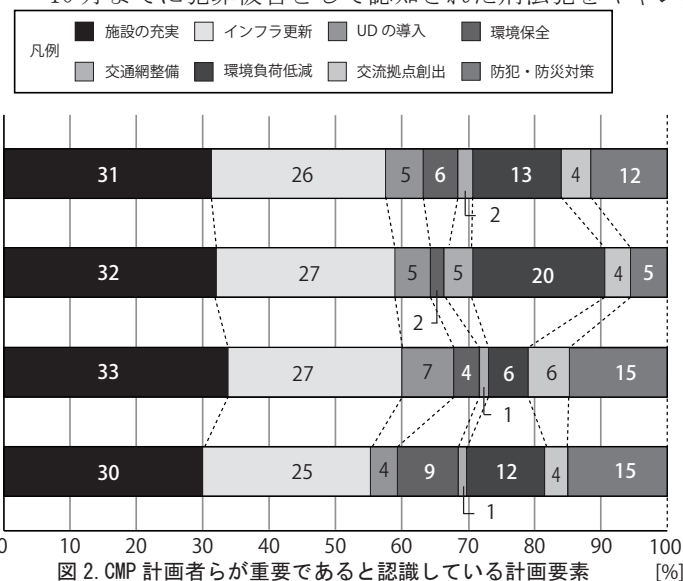


図 2. CMP 計画者が重要であると認識している計画要素 (最大 3 項目の選択式複数回答)

Consideration of Issues on the CPTED Approach in University's Campus Planning : Comparative Analysis between User Feelings and Crime-Damage Occurrences in Hokkaido University

NAKAMURA Ayumu and MORI Suguru

スマップに★印でマッピングし、全学組織が管理するエリアと重ね合わせ、犯罪多発地点の特徴について考察する。

3-2-2. 調査結果と考察

被害のほとんどが自転車や金銭の窃盗及び占有離脱物横領であるが、その分布からみた犯罪多発地点は、高等教育センター周辺やクラーク会館前、サークル会館前等の不特定多数の利用者が使用する、匿名性の高い空間であることがわかった。犯行企図者を思い留まらせる他の利用者の「監視」ないし「見守り」の機能が欠如していることが伺え、利用者の当事者意識の欠如と無関心が指摘できる。全学組織が管理するエリアで被害が多発している現実を受け止め、管理運営や警邏の方法を見直す必要があるといえる。

3-3. 北大安全マップと犯罪実態及び計画要素からみた課題分析と考察

3-3-1. 調査目的と調査概要

防犯意識の啓蒙や犯罪不安箇所の把握に用いられる「地域安全マップ製作」のワークショップ（以下WS）を通じて、CPTEDの基本概念を理解した利用者の犯罪不安に対する認識と、CMPの計画要素とを比較することで、利用者の視点を反映させたキャンパス計画の実施に向けた課題を考察する。WSは2009年から2011年の3年にわたって実施し、参加者71人を18のグループに分け、学内を南部（A）・中部（B）・北部（C）の3つのエリアを規定し、各エリアについての安全マップを作成させた。WSによって得られた安全マップを、利用者の意識を反映させたものであるととらえ、犯罪発生箇所の分布図と比較分析を行う。

3-3-2. 犯罪実態との比較

2009年度及び2011年度のWSにおけるC-1グループの成果物では、両年度とも「暗さ」、「人通りのなさ」等の利用者目線の評価のほか、問題を解決する対策と具体的な被害想定を提示しており、その指摘地点がサークル会館周辺で起こる占有離脱物横領や置き引き等の犯罪被害箇所と

近似している。しかしながら、当該敷地周辺が自然環境の保全を意図して計画されていることを考慮しきれておらず、より多くの視点から問題点と課題を分析し、解決策を模索する必要がある。

3-4-3. 計画要素との比較

犯罪不安が指摘された箇所は、CMP2006で位置づけられた相互の「コアとなるパブリックスペース（整備予定のものを含む）」を結ぶ「モール（歩行者専用道路）」上に分布し、犯罪不安解消の点で整備状況の不備が指摘される（図3）。

4. 大学キャンパス計画へのCPTED適用における課題

北海道大学のケーススタディから見出された、キャンパス計画にCPTEDを適用する際の課題についてまとめる。

(1) 明確なエリアゾーニングとアクセスコントロールによる、利用者の不用意な進入の防止

大学キャンパスは地域に開放する意図をもって計画されているエリアと限られた利用者のみによる利用を想定するエリアが混在している。これらのエリアが明確にゾーニングされ、アクセスコントロールのデザインがなされてなければ、前者から後者への意図せぬ進入が起きてしまう。こうした性質の異なるエリア間においては、舗装や仕上材等の切り替えや掲示による誘導や、各種ゲートでの入退構管理を、周囲の建物群の計画とあわせて行うことが求められる。

(2) 計画エリア及びその周辺組織毎の性格に合わせた条件、課題解決策、達成度の設定

ひとつのキャンパス敷地内にも様々な性格の計画エリアがあり、それらが隣り合うことも想定される。その際には、あるエリアの解決策が隣り合う別のエリアでは問題となる場合も考えられるため、所管部局間相互の調整と協議が必要である。この課題は大学キャンパスに限らず、広く公共空間の計画にCPTEDの手法を取り入れる際に共通して考慮すべき課題といえよう。

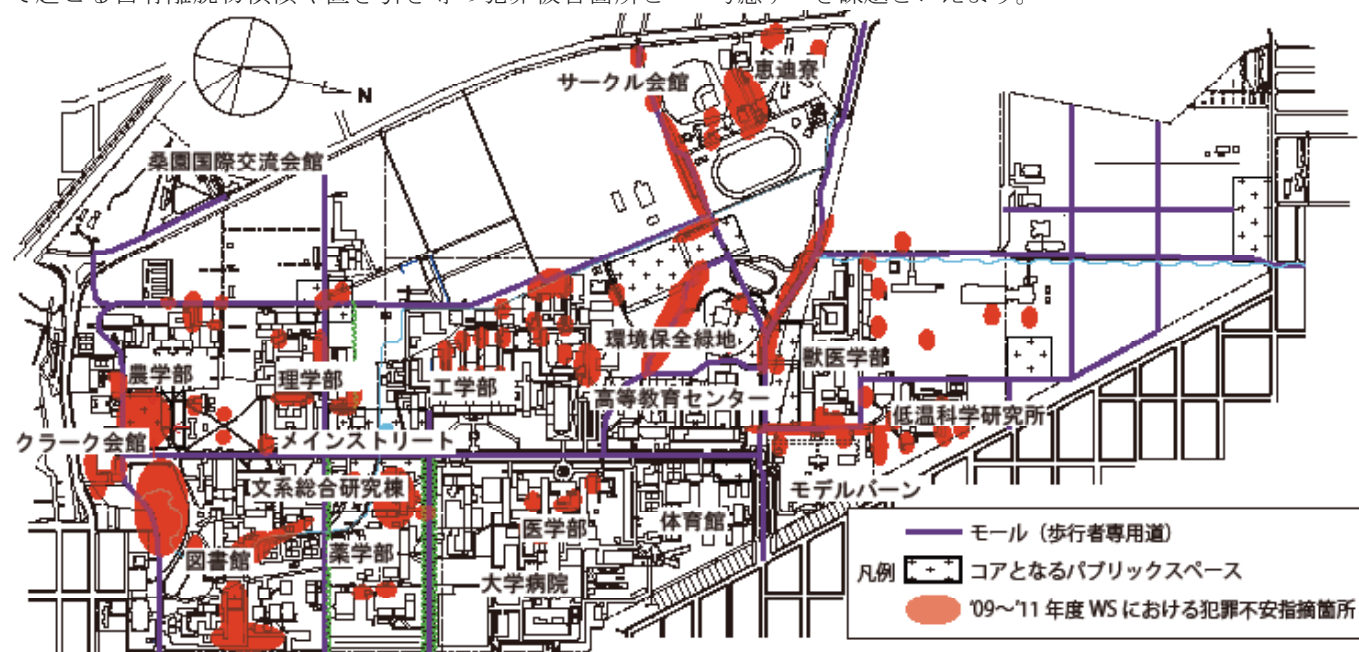


図3. WSにおける犯罪不安指摘箇所の分布と札幌キャンパスの骨格整備計画

* 北海道大学大学院工学院建築都市空間デザイン専攻 修士課程

** 北海道大学大学院工学研究院 教授・博（工）

*Graduate student, Graduate school of Eng., Hokkaido Univ.

**Professor, Faculty of Eng., Hokkaido University, Ph.D. in Eng.